



# 日本文学史

\* 吉田精一著作集 19

桜楓社

吉田精一著作集 第十九卷

日本文学史

昭和五十五年八月十二日 第一刷発行

定価 一八〇〇円

著者 吉田 精一

発行者 及川 篤二

発行所 株式会社 桜楓社

東京都千代田区猿樂町 二一八一—三

電話東京03二九五—八七七—(代表)

振替東京六一八〇二〇郵便番号一〇一

© 吉田精一 一九八〇年

Printed in Japan

著丁・乱丁本はお取り替へ致します。

0392-800780-0723

吉田精一著作集 第十九卷 目次

# I 新日本文学史序説

一 民族文学……………7

二 古典文学（一）……………18

1 前期（六四六—七〇九）

18

2 後期（七一〇—七九三）

23

三 古典文学（二）……………31

1 前期（七九四—九六六）

31

2 中期（九六七—一〇六七）

41

3 後期（一〇六八—一一五五）

52

四 中世文学……………60

1 前期（一一五六—一三〇〇）

60

2 中期（一三〇一—一四四〇）

73

3 後期（一四四一—一五七二）

86

五 近世文学……………93

1	前期	(一五七三—一七五〇)
2	後期	(一七五一—一八六七)
六	近代文学	……………

142

1	前期	(一八六一—一九〇五)
2	後期	(一九〇六—)

154 142

## Ⅱ 時代と表現

一	近代の夜明け	……………
---	--------	-------

181

二	個の自覚	……………
---	------	-------

188

三	社会意識の発展	……………
---	---------	-------

195

\*

第十九卷 日本文学史あとがき

201

解説 秋山虔

203



I  
新  
日  
本  
文  
学  
史  
序  
説



## 一 民族文学

何処の国の原始文学もそうであるように、我が国の古代文学も、個人の創作としてではなく、民族の文学として発生し、成長した。いまこれを神話と、歌謡との二節にわけて、出来るだけ立体的に観察しようと思ふ。

神話は嚴密な意味では文芸作品というべきではない。古代の人間にとっては神話の世界は実在界であつて、彼等の現在社会の生活、活動を決定し、如何に行動すべきかの指図をあたえるのである。古代人の生活に即して考える限り、それは空想的産物でも、芸術的作品でもないのである。我国最古の文献、「古事記」「日本書紀」は、その成立から見て歴史の書といふべきである。しかしいわゆる神話的思考法といわれる心的活動によつて解釈され、叙述されている部分は（記の上巻、紀の第一、二巻の神代史を主とするが、それだけではない）これを神話文学として扱うべきである。民族文学としては、この神話文学を逸することは出来ない。我が国の神話は、記紀以外、「古語拾遺」、「風土記」、「祝詞」、「万葉集」等に語られている。元来はそれは、個々の神話群に分れていた。恐らくは神事的な宗教行事が、最も有力な神話発生地盤だったのである。諸外国の例と同じように、季節祭や農耕儀礼のような集団儀礼の中心人物、代表者又は指導者が神格化されたことも想像される。アメノイハヤ物語が、鎮魂祭の祭儀に関係するものと説かれるのもその例である。歌垣の発生も元来はかような宗教的行事に起因するであらう。そしてこれらの神話は口頭により伝誦されて

長い年月の中に現存のものに成長して来た。現存の神話は、きわめて異質的な、複雑なものを結集、混在せしめていることを見のがし得ないのである。

かような神話の統一化、複雑化は何によって生じたか。口頭伝誦という一般的性質にもよろうが、別に特殊な理由がある。(一) 各氏族のもつ神話があつて、それらの氏族が大きい集団にまとめられて行くに従い、それらの神話も吸収され、その幅を増して行つた。(二) 外来の遊離した神話が附加され、神々に結びつけて語られた。(三) 民間伝説が参加した。というような種々の理由によるものである。

第一の各氏族の神話としては、アマテラス大神を最高神とする高天ヶ原系統の神話を中心とするが、他に出雲族の神話、筑紫族の神話、出石族の神話がある。中でも出雲系統の神話はかなり分量を古事記の中で占め、スサノオの命、大国主命を中心とするそれは、本筋の神話体系に食い入っている。このことは出雲族が高天ヶ原系民族とさして変らぬ文化と政治的、社会的勢力を有していたことを物語るであらう。(出雲風土記に於ても大国主命は開国の神とされているが、書紀に於ては本文から抹殺され、「一書曰」の中にわずかに名をあらわしているにすぎない。これは古事記、風土記と書紀との性質の相違を証する一つの材料となるであらう。)

第二の外来説話としては、たとえばスサノオの命の八岐大蛇退治、大国主命に関して語られる兔と和邇との説話、ヒコホホデミにからむ海幸山幸の神話等があげられる。それらの説話は或は大陸から、或は南方から、すべて海の彼方から渡来した。たとえば日本の開闢神話は、必ずしも外来説話でないかも知れぬが、太平洋諸国の神話の共通的性格から独立のものではない。Dixonによれば、この種の神話は二系統にわかれる。一は進化型(又は系譜型)という。先ず虚無混沌があり、そこから光や熱が出来、実体、形相を生じ、更に大

地と大空が生じる。これが天父地母と擬人化される。進化はこれとまり、以後自然現象や無数の神々が生じる。——即ち最初独化神があらわれ、これが宇宙の進化の各段階を象徴し、後に夫婦神があらわれて、この陰陽二神により万物発生の順序になるという径路をとる。その二は創造型である。神々が上天に住み、下大海に或神が石を投じて之を陸地とする。天神の子が虹の橋によって地上に降り、国土を経営するという風になっている。日本の天地開闢の神話はこの両者の複合型に近い。具体的には支那からの影響をうけ、或は五行説の暗示があるとしても、太平洋神話の一環以外のもではないのである。

兎と和邇の話、海幸山幸の話も、或は支那、印度、朝鮮、或は南洋諸島によって採集される。元来はそれだけが遊離したメルヘンで、もとは日本の神々と無関係であった。それが何かの理由で、或は偶然、一は呪術或は医療の神としての大国主に結びつけられ、他はヒコホデミに附会されたのである。それらの神話は複雑な変容をあたえられ、日本化しているにしても、その意義はこの本原的形態に還元して考えねばならぬ。

第三の民間説話としては、イザナギ、イザナミの性交（書紀一書では鶺鴒から教えられたというが、この類話は琉球はじめ太平洋諸域に多い）、桃の実の呪術的意味（これは支那から来たのであろう）、天宇受売と海鼠との説話、猿田彦がひらぶ貝に手をはさまれて死ぬ話、又イハナガヒメとコノハナサクヤヒメを中心とする寿命の短い原因を説く説話、古語拾遺に於ける産児と蟹との説話等、相当に数が多い。何れも独立した民間説話であったのが、本体の神話に組み入れられたのである。

かようにして日本の神話は、様々な要素を加えて、長い年月の間に次第に複雑化し、部分的附加が行われて現存の神話に組織せられたのである。そしてその本体となるべきものを、最も単純な形に還元する時には、恐らく、神の命によって、神の子が、統治すべき国土に君臨する、というくらいの原型に帰着するであ

ろう。具体的に現存の記紀神話に即して云えば、アマテラス大神を祖神とする高天ヶ原民族が国家を統一し、その子孫がこれをうけつぐというのが大眼目である。この意味ではそれが単元的な性格であつて、外国の神話にくらべる時、構成要素の複雑性にもかゝらず、異常な統一性をもっていることが指摘されるのである。國家と皇室を目標にして、中心を明確にうちたてようとする求心的精神の働いていることは、誰も容易に気がつく所である。

この事實の背後には、大化の改新による中央集権國家の成立がある。それ迄の我が国内は大和朝廷中心の聯合政權のもとにあつた。そしてかような聯合政權が國家的機構をそなえる為には、天皇の超越的絶對性を強調する必要があり、それが記紀編纂の態度にも反映していたのであろう。しかし一方からいえば比較的早くから国内が統一的方向に向つていて、それが求心的な神話として伝誦されていたことも想像される。我々はこの時代の國情を歴史にきく必要がある。

この場合我國史唯一の拠りどころとなる書紀の記述、とくに継体天皇以前の紀年の信じ難いことは定評がある。すなわち六世紀初頭迄の日本歴史の記述は信を措けないのである。そこで外国の文献がたよりになるが、先ず三世紀前半の日本の状態を記録したものととして、三国志中の魏志倭人伝がある。それによれば、倭國は百余國に分れ、漢の時に使を通じたもの三十國に及んだ。耶馬台國、投馬國(設馬か)はその大なるもので、各七万戸、五万戸を包容していた。女王卑弥呼は耶馬台の王であり、兼ねて二十九國を服屬せしめてゐる。彼女は倭國の乱れ、相攻伐した後に出て、「鬼道を事とし、能く衆を惑わす。」その國は盗みもなく諍訟も少い。風習上尊卑の差が顯著であり、諸國によつて文身がことなつてゐる。卑弥呼の死後は、怪百余歩もの冢を作つた。殉死した奴婢は百余人もあつたという。

この卑弥呼が「日御子」であり、耶馬台が「大和」であるかどうかについて、まだ決定することが出来な  
いとしても、既に三世紀前半の時代に於て、相当に広い版図にわたつて、統一的聯合政權の如きもの出来  
ていたことが推察される。五世紀の作「宋書」によれば、倭王は殆ど各国を支配し、使を宋に遣つて通交し  
た。この倭王讚以下王武は、史家によつて仁徳天皇以下雄略天皇にあてられている。そうして五世紀頃の版  
図は、奥羽地方を除く日本全土の大略と、朝鮮南端を加えていた。別に考古学の教える所によれば、応神、  
仁徳兩帝の山陵は宏大な前方後円の高塚型で、大和朝廷が各氏族間のうちにあつて四、五世紀のころ、既に  
強大な權威を振つていたことが推察されるのである。

日本神話はかような国家的背景に於て成長し、伝誦されて来たのである。従つてそれが大和朝廷中心の歴  
史に、切実につながつてゐることは当然といふべきであらう。諸氏族の祖先名或はその位置と職掌のうるさ  
い迄の列挙は、我國の神話の血統的、系譜的性質の一面を語るものであるが、それも天皇の超越的權威と関  
係させようとする意味から、各々の氏族の名と血縁の列挙に多大の関心をよせていた証拠である。ただかよ  
うな系譜的性格と記述が、神話の詩的な美しさを殺いでゐることは否定し難いのである。

記紀を中心とする日本神話がかように統一性、凝集性に富む一面、或はその為、たとえばギリシヤの神  
話などに比して、甚だしく散文的であり、非芸術的な観があるのを免れない。一般に叙事詩芸術は挿話的で  
あることを特色とするが、日本のそれが挿話に乏しいことも指摘されるのである。トロヤの戦争のような大  
がかりなものでない迄も、猛烈な争闘や、熱烈な恋愛は神話につきものであるが、日本神話にはその何れも  
欠乏しているのみならず、自然現象や天体に対する神話も極めてとぼしい。風土記になると多く言語的、非  
民間地名起原神話などであつて芸術的性質は一段と少い。これを総観して日本神話は大体に於て非美的、非

詩的であり、ギリシャ神話を壮大なるオーケストラにたとえるならば、日本のそれは細々とした一管の笛のような芸術性、詩的性質しか備えていないのである。

以上は日本神話を一つの構築物と見ての批評であるが、ひるがえって記紀はじめ上代文献に含まれている歌謡を見ると、万葉集に於て古典的整正の度に達した長歌短歌に見られない豊かな浪漫的抒情性と、万葉以上に素朴単純な形式をもっている。今記に載せる歌謡約百十余首、紀百三十首余を中心に、その他の文献に散在するものをも集めて観察しよう。

日本神話が種々雑多な伝説神話の集合であり、それらが種々の機会、種々の事情から神々に結びつけられて語られたものである以上、記紀の時代順序に従って説話や伝説の時代を定めることは出来ない。この事情は歌謡に於ても同じである。多くの歌謡は作者を銘記し、或は伝説を従えて記載されている。過去に於て最もすぐれた古代歌謡の研究者だった橘守部なども、これらの古伝から歌謡を解放することが出来なかつた。しかし今日は所伝を疑うところから研究がはじまる。

たとえば、古今集序によつて、我国和歌の起原とされた

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を

が、その五七七の完全な短歌形式を備えている所からして、遙かに後代の作物であると思われることは、もはや今日の常識である。神武期にとられてゐる、神武后イスケヨリヒメの歌

佐章川よ雲立ち渡り畝傍山木の葉騒ぎぬ風吹かんとす

畝傍山昼は雲と居夕されば風吹かむとぞ木の葉騒さわげる

も、虚心に読むならば、単純な叙景歌として見るべく、紀の所伝のような諷諭的な意味には解せられない。

その歌ぶりも万葉期の作品としてもよい程で、到底神武紀のものではない。

一体五言、七言は日本語リズムの生理的・心理的要求を最もよく満足させる、形態価値の最もすぐれた音数律であるともいわれるが、歌われる歌謡の場合には必ずしも五七(七五)調を必要としない。上代歌謡に於ては大体に於て五言、七言句が時代の下の作品と思われる物ほど増加して居り、その多少が歌謡の時代を定める一つのめやすとなり得る。上代歌謡の句数の統計的調査の結果は、十一、二句乃至十四、五句の歌型に於て最も五、七音の割合少く、そのへんに我が国古歌謡の最古の形のものが見出されるという。高木市之助氏によれば、例えば仁徳紀の

枯野を 塩に焼き 其があまり 琴につくり かきひくや 由良の門カの 門中の 海石いづに ふれたつ  
なづの木の さやく

の如きが最も日本歌謡の母胎に近いものだろうといわれているのである。

古代歌謡の作家や所伝が疑われる時、それならばその成立は如何なるものであろうか。作家についてはそれが民衆の内に生れ、伝誦する間に有名無名の詩人の手によって次第に改作され、異伝を生じたものと一応解釈されるであらう。それが如何なる場合に作られ、又は歌われたかについては、今は想像の範囲を出でないが、様々な事情が考えられる。

まず季節祭その他行事の折などに催される、劇或は劇的舞踊に於ける歌としては、記のヤチホコの神(大國主命)とヌナカハヒメや、スセリヒメとの唱和があげられるであらう。ことにヌナカハヒメの答えた歌の第二聯は極めて豊かな肉體感を盛りながら、少しも膚浅でなく、具象的・感覺的でありながら淫靡な趣きがない。

青山に 日が隠らば ぬば玉の 夜は出でなむ 朝日の 咲み栄え来て たくづねの・白きただむき  
沫雪の 若やる胸を そだたき たたきまながり 真玉手 玉手さしまき 股長に 寝はなさむを あ  
やに な恋ひきこし 八千矛の 神の命（ことの 語言も是をば）

これと殆ど同語の歌がスセリヒメの歌の後半にある。又ヌナカハヒメに対するヤチホコの神の歌と殆ど同意同語のものが、継体紀の勾大兄皇子の春日皇子を訪うた折の歌として出ている。猶ほ同意のものが万葉卷十三の長歌、及び卷十二の短歌に見られる。守部はこの一聯の歌を以て舞につけた楽府の謡物であり、歌舞の俳優の歌であらうと推断している。俳優の歌と見た所はさすがであるが、我々の見解では、それだから神詠でないとする守部に反して、却って集団的儀礼から芸術へ、祭式から劇への過程を、ここに見ようとするものである。祭式や儀礼の中心人物が、やがて祭式や儀礼から離脱し、祭事から離れて神としての生命と存在を得て行く過程が、これらの歌を通じて知られるとするのである。

次に譚歌ともいふべきものに英雄の業績を主題とした歌謡の一群がある。神武天皇にちなんで語られる軍歌もしくは戦闘歌謡、ヤマトタケルの命を中心とする歌謡などは、その類に入るであらう。その内神武帝に關する記紀の共通歌六歌、他に紀の二歌は。帝の作歌という所伝は信じられないが、（そして中には狩獵の折の歌とも思われるものもあるが）大体に於て意志のはり切った強い気魄に富むもので、戦闘的な歌謡だったことは明白である。そして神武東征の伝説と共に伝誦されたに相違あるまい。

みつみつし 久米の子等が 粟生には 葦一茎 其根が茎 其根芽つなぎて 撃ちてしやまむ みつみ  
つし 久米の子等が 垣下に 植ゑし 薑 口ひびく 吾は忘れじ うちてしやまむ

この類の歌謡は異伝が比較的とほしく、内容から見て或は久米族の伝誦したものかと思われる。それから